
銀夜のホワイト・レイヴン

西鳴波斯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀夜のホワイト・レイヴン

【Nコード】

N7392Y

【作者名】

西鳴波斯

【あらすじ】

この世には死を怖がる者もいれば、逆に憧れる愚者がいる。ある時突然湧き上がってきた意味不明な殺意によって父親を殺した姉は、罪を犯したことに酷く心を打ちのめされて家を出て行ってしまふ。そんな姉が残っていた、黒金色の拳銃「ハンドガン・モルス」。人間の心——その陰の部分に潜む”死神”。人は皆、死神を心に持っている。死の概念を具現化した存在が、心の中を蠢いている。貴方に、死の意味が分かりますか？

※FC2ブログにて公開している作品を加筆・修正したもの

です※

#01 殺し屋の姉、罰せられた妹（前書き）

※このお話はフィクションです※

#01 殺し屋の姉、罰せられた妹

Mors certa, hora incerta.
Carpe diem.

(クイントゥス・ホラーティウス・フラックス)

窓から覗く灰色の空。蔓延る雨雲にまるで巻き付くかのように蠢く幾つもの雷鳴が、大きな轟音を上げて地上を揺るがした。それに乗じて、勢い良く振り落ちる豪雨は横向きに吹き荒らされ地面にぶつかり、悪魔の囁きのような音を立てる。

だがしかし、目の前ではそんな音々が全く耳に入らないほどに異常な光景が広がっていた。

徐々に広がっていく赤黒い池。その中央に佇む、残酷な表情をしたまま白目を向いて倒れている男の姿。そして自分の右手には、雷鳴が反射して光る黒金色の、ハンドガン。

——私はこの手で、人を、殺しました。

真っ暗な小部屋にどんどん血溜まりが広がっていく。私の足元は、すでにその池の中だ。片足を上げようとすると、微妙に粘着性のある感触が足の裏から伝わってきて、ハンドガンを握る右手が小刻みに震えてしまう。

その時、また雷が激しく鳴り響いた。きっと私のした事を神様が怒っているんだ。罪を犯した私になんか生きる資格が無いと言って、私を焼き焦がすつもりなんだろう。

そう思った途端に、やっと怖いという感情が心に表れてきた。

目の前で父親が血を流しながら倒れている。その「死体」は、石のように微動だにしない。

しかし不思議と、どうやって父を殺したのかを覚えていない。突然身体中の血液が循環速度を速めて、心臓の音が耳まで届くほどに響き渡っていった、気が付くと私はここに立っていた。

けれど感覚は残っている。自分でこのハンドガンを手に取り、引き金を思い切り引いて父の中心を撃ち抜いたという感覚だけは。だから、殺したのは私なんだ。

でなければ、今日の前に広がっている光景の理由が付かない。

普段から根暗ではあったけれど、遂に私は「人殺し」となってしまうのだ。それも、実父を殺したという罪深い愚者になってしまった。

神様、どうか許してください。私は、血の繋がる父親を殺してしまいました。

「姉さん、どうしたの――」

「……!!」

不意に背後の扉が開かれたかと思い振り返ると、そこには蒼白とした妹の姿があった。

この世の終わりを告げられたかのような、絶望に満ちた顔だった。その位置からだ、と、小部屋の中央で亡骸と化した父の姿は、真っ先に目に付くだろう。

私は覚束ない足取りで、血の池の上を歩き、愕然としている妹に歩み寄る。ぴちゃ、ぴちゃ、と全く潤いの感じられない液体の跳ねる音が、足の裏から聞こえる。

そしてやっと何が起こったのかを把握出来たらしく、妹は何も言わずにそのままその場に、力無く倒れ込んでしまった。きっと、この血生臭い空気のせいでもあるだろう。私だって、こんなにも鼻を削ぎ落とそうとしてくるような臭いには耐えられない。

「ごめんね……」

けれど人を殺した私はもうここに居られない。ハンドガンには指紋がこびり付いているだろうし、何より今の自分の足は、父の流した血で真っ赤になってしまっている。

今の私の姿は、死神のように見えるだろう。――全ての生命に死を授ける役目を持つ、地獄の悪魔に。

そんな悪魔である自分は、これ以上妹を苦しませてはいけない。そういった理由もあって私は、今すぐここを出て行かなければならなかった。

外は激しい雨、突風、雷鳴。それでも行かなければならない。死神になった私なんて、ここに在る資格は無いんだ。

空の上にいる神様は、私に制裁を下すのだろう。それでもいい。私は裁かれるべきだ。

雷に討たれようが、突風に身体を破壊されようが、豪雨に潰されようが、どうにでもなればいい。それでこの罪が償えるのなら、本望だ。

古時計の短針が”？”を指していたのを見て最後に、その小部屋に振り返って、死んだ父親の顔を拝んでやった。私がどうして殺したのかは全く分からないけれど、とりあえず、ここまで育ててくれてありがとう、と。

果てしなく暗い闇夜の豪雨の中を、私は裸足で駆けていった。突然襲い掛かってきた、不可解な現実から逃れるために。



世の中が夜中という時間帯になっていた時に私は、街灯も点いていない裏路地を歩いていた。人気はあまり感じられなく、こうして携帯電話を開いていないと辺りがほとんど見えないほどに暗かった。そんな場所のひび割れた道路の片隅で、膝を抱えたまま座り込む少年の姿があったりする。すすり泣いているのか、それともお腹を空かせているのか、小さく口を動かしていた。

こんな寒い風の吹く夜中に、たった一人で一体どうしたと言うのだろうか。

(……帰る場所が、無いのかな)

事実、そうかもしれない。

あんなに小さな子でも、親を失ってしまい、希望を見つめる事をやめてしまっのだったら、こんな寂れた場所で死を待つ理由になりかねない。あの子の今の帰るべき場所というのは、死後の世界なんだろう。

そつと手を差し伸べてやりたかった。けれど、そんな事をして私が何をしてやれるのか。

もつと人望に厚い、優しい人がここを通れば良かったのに。と、そう心に留めておいて、私はそのまま再び歩み始めた。……少年は次の瞬間、ばたつと倒れて、動かなくなった。

やはりそうだった。今更私が手を差し伸べたって、死が少し遠くなるだけだったんだ。生命というのはいつか死んでしまう。それが早いか遅いかというだけの事。

少年はきつと、天に召されるだろう。不幸な運命を歩ませてしまつてすまなかった、今度は幸せな生き方をさせてやろう、と神様が慈悲を与えてくださるかもしれない。だから、助けてやるのは私がすべき事ではない。

目を逸らして、ふと携帯電話の左隅の時計を見た。小さく白い文字で『11…26』という表示がされている。この時期には、特に寒い風の吹く時間帯だ。

ロングコートの裾を揺らすほどの緩やかな風ではあるけれど、そんな僅かな風であっても寒いものは寒い。

もう、この季節も何回目だろう。私が一人きりになって、どうしたら良いか分からないまま彷徨い始めてから、一体どれだけの時間が経ったのだろう。

私も死んでしまえば、神様がまた別の運命を下さるかもしれない——と、何度そう思っただろうか。何度、自らの額にハンドガンに向けて、自分を殺そうと思っただか。

けれど私は怖いんだ。どうしてもその引き金が引けないまま、今に至る。自身の頭蓋骨を撃ち抜いたとして、それからどうなつて死

んで、どうやって神の国へ誘われるのだろうか、などという葛藤が私の手を支配してしまい、引き金を引かせてくれないんだ。

実に皮肉なものだ。自分が死にたいと思った時だけ死は遠ざかり、生きたいと思う者には絶対なる死というものが与えられる。

私が今、そのどちら側に立っているのか。それが分からないままこの場所にいる。

「――待って！」

しばらくそのまま歩いていると、いきなり目の前に銀色のバイクが立ち塞がるように停まり、運転手はヘルメットを外して、茶色の長い髪を垂れ流して見せた。

「あなた、どうしてこの時間帯にそんな平然と動いていられるの？ も、もしかしたら！ 大変、すぐ連絡しなくちゃ！！」

突然変なことを聞く女性などと、呆然としながらその顔を見上げてやった。

こちらを引き止めたわけも話さず、女性はコートの内側から携帯電話を取り出して話し始めてしまった。何やら慌ただしく一方的に話している。相手の人はどんな人か知らないけれど、応対が非常に大変そうだ。

「そう、あなたもあの能力者の一人なのね」

「……？」

わけの分からない言葉を告げると、こちらの有無を言わずに女性性は私を背中から押し始め、無理にバイクの荷台に座らせた。

何が起こって一体これからどうなるのか前も後ろも分からないまま、私を乗せた女性のバイクは、真っ暗闇の中を駆け抜けていった。

――私に「死神」が降り立ったのは、それから数時間後の事だった。



終わりが来るのは全くの必然なのに、どうしてそこまで怖がっているのだろう。この世に生を受けた時点で貴方が死ぬ事なんて決まっている。そんなの当たり前でしょう。生きる道を往くのなら、その最奥には何があるのか、知っているはずなのに。

本当は分かっているのでしょうか。絶対に、今いるその場所と別れなければならない日が来るのを。永遠にそこに留まって生を感じるなんて事は、「命」という脆いものには無理な事なんだ。

生まれてくるものは、必ず滅ぶ。肉体が滅んで目に見えなくなるほどの小さな欠片になって、生き続けている人々からは忘れ去られていく。

そんな道理がこの世にはあるという事を理解しているから、貴方は今を生きているんだろう。

誰にも忘れられたくない。そういった思いが生まれて、初めて人々は死を怖がる。

だがしかし、そんな事を承知の上で、やっと命というものは生まれてくるのでしょうか。生きる証を頂戴するには、死ぬという事を承知させて、それで始めて授かることが出来るんだ。

なのにどうして恐れている？

命を授かった者は必ず、その契約を介しているはずだ。その審判の前で頷いたはずだ。

だから、私には、貴方が死を恐れている意味が分からない――。

魂という概念においてもそうだ。

仲間が死んだ後に、ヒトというのは死体を土に埋める。他の生き物からすれば奇妙で不可解な行動だろう。それはヒト意外の生き物に、魂という概念が無いからなのだ。

しかしヒト――すなわち人間には、それがある。

埋めてやる事で土の暖かみを実感させつつ魂を安らかに眠らせてやるのだ。死者の念をこちら側へ干渉させないために。死んだ者と

生きる者の世界は別だと定義しているから、そんな考えが生まれたのだろう。

しかし、死者はそれで報われているんだろうか。

例えば貴方が死んだとして、まだ生き続けている人々との世界を断絶されてしまうんだ。それを考えた時貴方はどう思うだろう。

終わりを迎えた魂は、悲しいんだ。

しかし涙を流す瞳も無い、言葉を訴える口も無い、肩を叩いて気付けさせる手も無い、「行動」をするための肉体が無い。

肉体を求めて、死者の魂はこちらの世界に足を踏み入れてくる。生きている人々は、それが怖いんだ。だから死者の世界を設けてこちら側とは断ち切っている。

人間というのは、最大的に自分勝手なんだ。

先ほどまで生きていた親友が、幽霊となって出てくると、怖がって顔を青ざめる。そして無理やり払いのけようとする。死んだ今でも、まだ一緒にいたいだけなのに。

やはりそうなんだ。

人間は「命」を授かった時、審判にウソを吐いたんだ。

死ぬのが分かっているながら、死ぬのが怖い。そんな自分勝手を貫き通そうとしている愚者だ。そんな愚者で覆われたのが、この星。審判はどう思いながらこの星を見ているだろう。

だけど私はウソを言わなかった。私は死ぬ事なんか怖くない。

そんな愚者になんかならない。命は絶対に滅びるものなんだ。絶対に誰の目からも見えなくなつて、消えていってしまうものなんだ。私はそれを、分かっている。死を恐れている貴方とは違う――。



とてつもなく、居心地が悪い。

あちらこちらから視線を浴びせられて、どうも落ち着かない。

真新しい紺色の制服にグレーのストラックス、またはスカートという周囲の人たちから見れば、明らかにこちらが浮いてしまうのは分かっていただけれど。

「いちの、エフ……」

手渡された用紙の中に自分の名前を見つける。

上から数えて十七番目。真ん中より少し上のところにあった。

月伽学院高等部。^{げっとうぎ}

その珍しい構造の校舎は、「満月の日時計」という通称がある。建物に注ぐ、満ちた月の光による影で、時刻を判別できるのだ。そのため校舎の周りには、時刻を報せるローマ数字が十二個彫られている。もっとも満月の見える時間帯というのは夜に限るのだが。

そして今立っているこの場所は、校門をくぐって昇降口へ向かう間の広い道。

足元にある数字は「？」。満月の夜にはきつとこの場所にも影が差すのだろう。そこから歩いて三十歩ぐらいの所に、隣の数が同じ様にある。

ただ単純に、不思議な雰囲気为学校だ。

校舎に近づくたびに鼓動が高鳴る。

いや、これは「胸騒ぎ」と呼ぶのが相応しいのかもしれない。

確かに視線が気になって仕方が無いのだが、それとは別に落ち着きを保たせない何かが、ここにはある——気がする。

ぱた、ぱた、と上履きがリズム良く床を叩く。

日時計と呼ばれるほど縦に長い校舎だけあって、廊下は極端に短い。一つのフロアに教室が五つという内部構造。本当に変わった校舎だな、と新鮮味も少なからず感じている。

「いちの、……エフ」

エレベーターを六階で止めて少しの場所。『1ーF』と書かれた札が、頭の斜め上にあった。用紙を再度確認してからその教室へ足

を踏み入れる。

既に何人かの生徒が中にいた。――当然の事ながら、注目される。なぜかという、今身に纏っているのは、明らかに周囲とは異なった制服だからである。

黒いブレザーに赤いチェックのスカート。胸にはスカートと同じ色をした六芒星型のエンブレム。そもそもこのエンブレムは、この学院のものではないのだ。

すなわち、周囲から見れば自分は、服装から何から全く違う「別物」だ。

どうして他の学院の人が紛れているのか、どうして彼女だけ制服が違うのだろう、とも思われているのだろう。校門をくぐった後に周囲から当てられた視線も、全く同じものだ。

しかし、別に着たくて着ているわけではない。

無理やり着せられたのだ。どうしてなのか、訳も聞かせてくれないうままに。

ただ一つ言われた事といえば、

「その制服は特別製だからね。あなたを護ってくれるのよ」

投げやりにそう言われただけだった。何が特別なのか、一体何から護られるのか、肝心な部分を全く伝えられなかったのだった。

そのせいでこうして浮いているというのに。帰ったらちゃんと訳を聞こう。



「指定された席に座りなさいねー」

机の中に必要な個々の書類とか色々入れてあるから、間違いの無いように」

気だるそうにそう言った、この教室の担任となるらしいその先生は、若い女性だった。化粧の乗りが少し濃くて、口紅が深紅に際立っているのがここからでも分かる。

けれど、先生の口紅だけではなくて、相変わらず私も教室の中で際立っている。

集団の中に紛れた異端者のようだった。

良く言えば、砂の城の天辺に刺す、細い木の枝。異様に存在感を
かもし出す物体のよう。

「中の書類は一応確認しておいてねー」

先生が必要以上に忠告するのは、それほどに大事な書類でも入っているのだろうか。

がちや、がた……。

おもむろに机の中へ手を突っ込む。

すると、貴金属のような触感が手のひらを伝ってきたのだった。

書類が入っているのではなかったのだろうか。机の中で金属の擦れる音がする。右手でそれを覆うように握り締めてみて、初めてそれが何なのか判別できる。

（銃だ……）

どうしてそうやってすぐに理解出来たのかさっぱり分からないが、指をそのまま動かしてみて、明らかに拳銃の形をしていたのに気が付いた。

この学院は生徒全員に拳銃を配布する校則でもあるのかとあり得ない想像をしつつ、それを机の中で握ったまま教卓に立つ先生の方を見る。

しかし何も不自然な様子は無い。周りの生徒たちも平然と書類を眺め始めている。

皆の視線がこちらを向いていない隙を見計らって、その拳銃を制服のポケットへ押し込む。

新人生がいきなり拳銃などを持ち歩いているとは何かと問題があるだろう。

「えー。では入学式の会場へ向かいます。廊下に列作って下さいねー」

僅かに重くなった右ポケットを気にしながら、周囲に感付かれな
いように教室を出た。

依然として物珍しそうな視線は、私の背筋を突つつく。

#02 月影に蠢くしかばね

校舎とは離れた場所にある大講堂。

学院長らしき白髭を垂らす人物が講壇に上がり、しわがれた声で話を始めた。歴史上の偉人の言葉などを用いて、何やら説教臭い事を、鈍い口調で喋っている。

そのまま暫くして、やっと学院長の長ったらしい話が終えられた。周囲の生徒たちは当然のようにあくびを垂れている。

『続きまして、新一年生の主任を務めます、天野様よりご挨拶を頂きます』

「……えっ」

私も周囲につられてあくびが出そうになったその次の瞬間、その名前を聞いてあくびはプツツと途切れるように止まってしまう。

『はい皆さん、ごきげんよう。』

私がこの初々しい学年の主任をします、天野です』

講壇の上には、やはり自分の知る人物が歩いてきた。

まさに意外な人物だった。

なぜかというと、彼女は私の過ごす寮の、寮長であるはずの人物だったから。

この皆と違う制服も――そもそも私がこの学院へ通うことになったのも、あの天野さんのお陰だ。けれどこの学院の先生の一人で、しかも学年の主任だなんて事実は全く知らされていない。

出会った時から謎の多い人だな、とは思っていた。

『皆さんの三年間を過ごす場としてこの学院を選んで頂き、光栄です。ぜひ、充実した有意義な時を過ごして欲しいものです。ふふっ……。』

えー、では突然ですが、こんな事を聞いてもよろしいでしょうか？』

透き通った声。先ほどの学院長の言葉と比べては失礼だが、マイ

クを介していてもはっきりと言葉の一つ一つが耳に届く。
だからその問い掛けにも、眠そうにしていた生徒たちには耳を傾
けざるを得なかった。

『――”カルペ・ディエム”、”メメント・モリ”。
貴方が持っているその命。大切にしていますか？』



「お帰りなさい。どうしたのかしら、随分遅かったね」
寮へ戻ると、これまた当然のように出迎えてくれる天野さんの姿
があった。

綺麗な爪を光らせる指で髪を払い、ほんのり桃色になった頬があ
らわになる。私が帰る間にお風呂にでも入っていたのだろうか。

「その顔、何か聞きたそうね？」

「それはもう山ほど……」

「ひとまず座って座って。紅茶でいいかしら」
寮に帰って早々話を聞くことにした。

この制服の事、机の中に入れられてあった拳銃の事、そしてどう
してあの学院へ入学させたのかを。ここ一ヶ月はこの寮にいるのだ
けれど、ちっとも話してくれない事ばかりだったので、他にも積ま
れた謎は多いのだった。そう、彼女の事さえも。

少しして天野さんが、手際良く紅茶を淹れて持ってきた。

まるで血のような色をした「ブラッド・レッド・ティー」。本当
に天野さんがこの紅茶を一番好んでいるという事ぐらいしか、彼女
の事は知りさえしない。

「んん。ああ、いい香りね」

深紅の鏡みたいな紅茶から漂う匂いは、確かに心地の良いものだ
った。例えるならば、ナツメグアロマを焚いているような、スパイ

スの効いた匂いだ。

「さあて、じゃあ、私の興が削がれる前に話すとしますか」

「……お願いします」

そしてそれを半分ほど口に含んで飲み込み、にこにこ満足そうな顔をしてティーカップを置いた。

艶かしい唇に残った赤い雫を拭う舌遣い。美しき吸血鬼のようであり一層妖しさを際立てる。

華奢で背の高い、俗に言う「美人」な彼女の事だ。

そんな表情を使っては魅了されてしまう男性も少なくないのではないだろうか。

と、そんな魅惑的かつ妖しさも秘める彼女の事をまじまじと見つめていた。話を始めようと、その唇がゆっくりと開かれる。

「まず何から話しましょうか。うーんそうね、その制服の事を話しましょうかね」

何度も多く注目を浴びてしまう、その原因となったこの制服。

見てくれは割りと色合いが良くて、肝心のデザインもそこそこ良好。しかし何故他の生徒と制服が異なるのだろうか。

「あなたを護る、と言ったよね。あれは決してデタラメなんかじゃなくってよ。」

その制服は、『呪い』から護ってくれるのよ」

「呪、い……？」

聞こえてきたのはおかしな言葉だった。

そのせいでこちらも歯切れが急に悪くなる。咄嗟のわけの分からない単語に動揺を隠せないでいる。

「ええ呪いよ。しかもかなり悪質のね」

早速意味が分からない。「謎」を通り越して、「意味不明」だ。

その次には、全然分かってないでしょ、と表情から胸の内を見抜かれてしまった。

「言葉に間違いは無いの。『呪い』は『呪い』だから。」

あの学院は呪われているの。

だから恐らく、今日で大勢の生徒が呪われたに違いない。伝染力が早いからね」

遂には学院自体が呪われていると来た。

何だか先ほどの演説といい、本当に謎を残す事ばかり言ってくる。あのカタカナ語は一体何なのかも分からないまま。あれこそ何なのだろうか。

「命を大切にしていますか？　って皆に聞いたのは、そういう事よ」
難しそうにするこちらの表情を伺いながら、天野さんは得意気になり始めた。

「だって、呪われた人は――死神に喰われるのよ」

その一瞬、辺りの空気が凍った。

冗談半分で言っているのか、と目を合わせてやると、どうも冗談を言っているような顔ではないのが分かる。

冷たい声色だった。

もともと何かと謎の多い彼女だ。だからこそ、余計に身体中が鳥肌立つ。

「……さっきから、嘘を、言ってるんですか」

「嘘じゃないわ。そうやって私の親友も、呪われて死んだのだから」

「怪談を聞いているわけじゃ、ないんです」

「ええ。……これは”事実”の話なのよ」

びくびくしている私を見て、面白がってからかい始めたのかと思つて、少し反発してみたものの、冷たい口調は変わらなかった。

「その『呪い』を回避すべく特別に作られたのが、その制服よ。」

――いいかしら？

“死神”はどんな生命の中にも存在する。それをお忘れずに、ね？」

妖しげな表情に戻った彼女は、一息吐いて再び紅茶を口へ運んだ。
そんな信じがたい、あり得ない話。……どうやって信じろと。

「ああ、それはもともと、あなたが持っていたのよ？」

握る手の中で物々しいオーラを放つ、黒金色の拳銃。

もともと持っていた、というのは恐らく、私がこの寮へ来た時の事だ。

突然夜道で声を掛けられてバイクに乗せられ、そして何が起きているのか分からないままここへつれて来られたあの日の事。

「あ、そっか。覚えてないのよね」

「どうして……？」

「だってあなた、最初にここへ来た時は、まるで人形のような目は無ろとしていて、肌は青白くて、本当に死ぬ寸前だったのかもって思うくらいにね。」

だから記憶が欠落してるんだと思う。でも全てを忘れてる訳じゃないさそうなんだけどね」

確かにそういう感覚はある事にはある。思い出そうとしてもまるで頭に浮かんでこない、という現象が何度も起きている。

自分の歳だとか、言葉だとか、そういう事柄は明確に覚えているけれど、私はどういう家に住んでいて、どういう学校へ通っていたか——どうやって生きてきたかという面だけが思い出せないのだった。

だからこの寮へ入れてもらう際に書かされた履歴書などは、ほぼ白紙状態。

書くことができたのは私の名前——「黒崎寧々子」。それと年齢や性別、という事のみ。

「でも、すっかり元気になったね。」

血色も良いし、凄く可愛くなった。だから制服も少しオシャレに作ってみたの」

と、天野さんは少しだけ悪戯っぽくほくそ笑んで髪を払った。

ごーん、ごおーん……。

丁度、紅茶を飲み干した途端に寮内の鐘が静かに響いた。十一時
を報せる鐘だ。

「あらもうこんな時間。……そうね、話すより見てもらった方が説
明付くかしらね」

「見てもらう、って」

「準備して寧々子。すぐ月伽学院へ向かうよ！」



漆黒の夜道を走るバイクに乗せられていると、真っ向から吹いて
くる向かい風がとても冷たい。白いコートを制服の上から羽織って
はいるものの、しがみ付いている天野さんの背中に頬を擦り寄せて
いないと、顔中が霜焼けになりそうだった。

けれどもこのバイクを運転している天野さんは、その向かい風な
んて何のその、という表情をヘルメットの下で浮かべている。……
なんで私のヘルメットは用意していないのだろうか。

しばらく滑走している最中に見つけた、街の大時計が『11…1
1』を差していた。

その途端、ヘルメットを付けているせいなのかもしれないが、急
に視界がフツと暗くなったような気がした。

列車がトンネルに差し掛かった時のような感覚だ。

そんな中、バイクは信号の無い大通りを走り続ける。

(えっ……)

いや、信号はあった。

よく見てみると、赤と青の部分が薄っすらと光っているままだ。
丁度信号が「青」に変わる瞬間だったのだろう。だから両方が薄っ
すらとしか光っていない。

まるで時間が止まってしまったみたい、周りの風景も何だか止
まっている様に見えた。

そしてバイクは何事も無かったように学院へ辿り着く。
校門は当然、閉まっている。

「寧々子、いい？ モルスはすぐに取り出せるようにね」

「……もるす？」

「その拳銃。『ハンドガン・モルス』の事よ」

ポケットの中に押し込んであったそれを取り出してみる。

どうやらこの銃は「モルス」というみたいだ。それとも、ただ自分が忘れていただけなのだろうか。

「日時計の場所へ行くよ。」

——今の時刻、『？』のところにね」

その言葉を聞いた次の瞬間、背筋が一気に凍った。

先ほどの学院へ訪れた時に感じた胸騒ぎによく似たもの。自然と拳銃を持つ右手が、小刻みに震え出す。一体、何なのだろう。

こつ、こつ、と二つの足音が、静寂に包まれた道に響いていく。

天野さんは校門の前で立ち止まり、何をするかと思って見ていると、鍵が掛かっているはずのその門を、まるで襖を開けるかのようにこじ開けた。

「行くよ。ここから先は、絶対に私から離れないでね。約束」

「……？」

何やらそう告げると、天野さんはスタスタと歩き出してしまった。その言葉の意味はまだ分からなかったけれど、この胸騒ぎの事と関係しているのかもしれない、と思いながらその背中を追うように、私も歩き出した。

校舎に近づいていく度に、身体の中を駆け巡る血潮が疼く。循環する速度が急に速くなり、心臓も鼓動を速めていく。

立ち止まってやっと分かる。

これは、胸騒ぎなんかじゃない。

まるで自分の中で、別の何かが暴れているようだった。そんなあり得ないような、不思議な感覚。

「感しない？ 殺気染みたような、おぞましい視線を、ね」
視線を上げてみる。暗い空には大きな満月の光が校舎を差している。

不気味で気味が悪くて、気をしっかり保っていないと意識が吹っ飛びそうだった。その妙な感覚のせいでもあるだろう。

それに、校舎へ近づくたびにそれは増していく。

天野さんの言う事もあながち嘘ではないのかもしれない。と、そんな状況に陥って初めて、そのからかうような言葉を信じてみるこ
とが出来た。

「『刻』は訪れているんだけどね」

しばらく沈黙だった空気をかち割って、また彼女は訳の分からない
事を言い出す。

「もう、さつきから、一体何を言ってるんですか」

「うふふ……。私が頭のおかしい人に見える？ ま、無理もないよ
ね」

その問いには頷かざるを得なかった。

死神だとか、呪いだとか――先ほどから聞いているのは、いかにも普通の人がべらべら語るような事柄ではない。オカルト風な、怪
しい雰囲気立ち込める話ばかりだ。

でも何故か、天野さんが単にからかって言っているだけのよう
に、全く聞こえないのだった。

もつと真剣で、冷ややかで、まるで事実だけを述べているような
それがどうも私には、胸に引っ掛かる思いがした。

ふと彼女の顔を覗き込むように見上げてみると、今だってそんな
真っ直ぐ先を見つめた顔をしている。

だからこの人は、全く読めない。

ざわざわと風が流れた途端、どこからともなく生臭い匂いが鼻を
刺した。嫌な暖かさがあり、ほんの少しだけ鉄が含まれたような匂
いだ。

まるで、どこかで生血が流れているような――。

「ひっ……!!」

一瞬、目を疑った。

視界が捕らえたその物体に、声にならない悲鳴が上がった。

「おいでなすったわね!」

ほぼ同時に天野さんもそれに気付き、咄嗟に私の前へ飛び出る。

そして彼女は鋼色のハンドガンを腰から取り出し、銃口をその不気味な物体に向けた。

よく目を凝らしてみても、その物体が、赤黒い血の色をした肌の「人間」だと気付く。

ばぁんッ!!

空気が凝縮された風船が大きな音を立てて割れる、そんな音を一つ、また一つと轟く。

瞬間の出来事だったので何が起こったか理解に遅れたが、次に目を開けたときには、目の前に蠢いていたその人間の形をした不気味な物体は、身体中から鮮血を吹かせて倒れていた。

しばし見守っていると、その身体は肉片のようにバラバラに朽ち果ていった。

天野さんが、銃で撃ったのだ。

何発も、何発も……、その照準を当てた肉体が穴だらけになるまで。

「いい色の血ね。きっとこの子は、今日入学した、あなたの同級生の女の子よ」

人を撃ち殺したにしては、天野さんはかなり冷静だった。

むしろ冷やややか過ぎて、彼女のそんな口調ですら怖くなってきてしまう。

「こ、ろし……た、の?」

「怖かったでしょう。あれがさっき言った、『死神』よ。」

まるで皮膚が剥がれ落ちて筋肉があらわになってしまっ、そう

ね……理科準備室に置いてある人体模型のようだったでしょう？
可哀想に……」

どうしてここまで冷静なのだろう。天野さんは、私の目の前で、人を殺した。

凄まじい悲鳴が上がりそうになるが、恐怖という大きな蓋がそれを口にするのを許さない。ただじっと小刻みに震えて見ているだけしか出来なかった。

「それでも、ただの怪談だって言えるかしら？」

そして何故か得意気だ。

「何かの催しモノでもなくてよ。」

これがこの学院の『呪い』であり、死滅させるべき存在なの」

「天野さんは、ひ、人殺しなんですかつ？ ……私を、一体どうするつもりで」

「――あなたも奴等を殺せるのよ。ううん、殺すのよ」

こちらの声を掻き消すかのごとく、その重々しい言葉は胸を押し潰してきた。

そんな言葉に打ちのめされていると、また周囲から、先ほどと同じ様なオーラをいくつも感じた。

今度は一人じゃない。なるべく冷静になってから見たところ、天野さんが「死神」と呼ぶその物体は、どうやら四人もいる。

「死神は四体ね。寧々子、三人は私がやるから。」

残りの一人はあなたがやるのよ。頼んだからね！」

「そ、そんなの……」

こちらの有無など気に掛けず、天野さんは近づいてくる死神たちを誘き寄せるように走り出す。

案の定なのかどうか分からないが、四人の死神がそちらに気を取られて、べち、べちという不気味な音を立てて歩き出す。全身の毛が逆立つほどに気味が悪い。

そしてまた、天野さんの放つ銃弾の轟音に肩が跳ねる。

気が付けば私の右手がポケットの中のハンドガンを握り締めている

て、後は引き金を引くだけ、という状態にまで持ち上げた。

腕の角度が身体に垂直まで上がって、銃口はその赤黒い肉体をした物体を捕らえている。

引き金に引っ掛ける人差し指が、感覚が麻痺してくるほどに震えてくる。

やっぱりそんな事、出来ない。

あんな不気味な姿とはいえ、あれは人間。撃てない、撃てるわけがない。

「ね、寧々子！ 私の銃、どうやら弾切れみたい！ 早く最後の一人を撃ち抜いて！！」

自分の右手ばかり集中している間に、既に三人の死神が血を吹いて倒れていた。

急に焦ったような素振りを見せた天野さんは、その死神を引き付けながら、なるべく私から死神を離そうとしている。かといって銃弾が当たらなければ意味が無いので、十分に狙い撃ちできる程度の距離までに。

しかし、どうしても銃を持つ手が躊躇している。

この引き金を引くことで、私の見ている世界が全てひっくり返ってしまいそうで、今までの自分が上書きされてしまうようで、この惑星が滅亡するほどにそれは怖かった。

今、私は断崖絶壁に立たされている。周りを取り囲むのは、私を死へ誘わんとするおぞましい怨念。一步足を滑らせれば、全ては、死に繋がる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7392y/>

銀夜のホワイト・レイヴン

2011年12月5日21時52分発行